

柴四朗の国権論

——『佳人之奇遇』における「自由」——

はじめに

東海散士（柴四朗）著『佳人之奇遇』（博文堂発行）は、全八編十六卷、明治十八年（一八八五）から同三十年にかけて刊行された大著である。著者柴四朗（一八五二〜一九二二）は、自らを主人公東海散士として登場させ、自身の見聞および体験を基軸として物語を展開させていく手法をとっている。いわば同時代史である。したがってこの書物は、各編が書かれた時点での柴の置かれた思想的、政治的立場に注意を払いつつ慎重に読み進める必要がある。^①

ところで、『佳人之奇遇』は政治小説と呼ばれてきた。政治小説とは、政治問題や政界の人物を主題とし、政治思想の宣伝や普及を目的とした小説と説明される。とくに日本では、明治十三年（一八八〇）頃の自由民権運動の興隆期から同二十年前後の国会開設運動の頃までに流行した、自由民権の理想を小説の形で世に訴えようとした一群の小説をさす、との一般的理解がある。国文学的分野の研究史においては、政治小説は近代以前の文学と評価されてきたが、その文学史的位置付けの問題は現在においてもなお流動的である。^②政治小説の持つそ

高井多佳子

のような問題はひとまず置くこととして、筆者は、この書物を文学としてではなく、著者柴四朗の政治論説の書として取り扱う立場をとろうとするものである。何故ならば筆者は、『佳人之奇遇』を、通常説明されるような一般的な政治小説の枠組みには納まらないものとして捉えているからである。そして歴史学の立場から改めてこの小説を読み解き、『佳人之奇遇』を再評価し、その上で新たな柴四朗像を構築していく必要があると考えている。

『佳人之奇遇』に関する代表的な研究として挙げられるのは、柳田泉「『佳人之奇遇』と東海散士」である。^③氏の精密な調査によって、柴四朗履歴と『佳人之奇遇』執筆の背景が明らかにされており、この点においてこの研究を超えるものは存在していない。柳田氏は、「政治小説」としての『佳人之奇遇』の筋を丹念に追い、各編であらわれ主人公東海散士（柴四朗）の政治的主張を抽出し、引用しながら、それが当時の時代背景といかなる連関性があるのかを実証されている。しかしながら、その政治的主張に至る柴四朗の思想、及びその背景に関する考察においては、『佳人之奇遇』の「全編に漲る強烈な熱情」は、「作者自身の感情を正直に吐露しているから」、「作者は、自

窓 身亡国的感情を経験した身であり、従って世界の諸衰亡国に対する感情も衷心から出る」、そこで「日本が亡国の悲運に陥られればせぬか、アジアを何とか救済する途はないかと憂う感情も衷心から出る」、

「この作の熱情の真实性の鍵は、散士が實際亡国の遺臣として、幾多の悲辛を味わわれたという事実」とされ、『佳人之奇遇』を「いわば欧化主義的混沌の真つ只中にたたきつけた、国権的感情の爆弾」と定義されるに留まっている。柴の思想をこのような定義にとどめてしまうことは、充分でないと筆者は考えている。氏の研究からもはや数十年が経過し、柴四期に関する新資料の発見もある今、改めて新しい『佳人之奇遇』論が待たれる時期に来ているのではないかと思われる。^④

その他の『佳人之奇遇』に関する先行研究は、政治小説を文学史上どのように位置付けるかという問題に代表されるように、文学史的側面からのアプローチによる研究がそのほとんどをしめる。その多くは政治小説という枠組にとらわれるあまりに、文学作品としてこの書物をどう評価するかというところに重きがおかれている。それは、登場人物の性格付けの不明明さ、構成力不足、或いは長きにわたる刊行の結果としての小説の変質（前半の壮大な伝奇ロマノ小説の趣から、後半の政治家東海散士の身辺雑記のようになってしまうことへの変化）などが指摘され、小説として高い評価を得ているとはいえない。^⑤

また、飛鳥井雅道氏は、「東海散士は次第に夢みる人から現実政治家へと転進、作品にこめられた理念の純粹さは失われ、亡国のいきどおりは影を薄くした。国権の主張は、現実の否定、危機感を失い、日

本の「亡国」の危機が去ると同時に、次は侵略への歯止めを失った国権論へとおちこんでいった。」とされる。しかしながら、そもそも散士は「夢みる人」であったのか、作品にこめられた「純粹」な「理念」とは何かという疑問が生じる。また、『佳人之奇遇』が「亡国のいきどおり」から「侵略への歯止めを失った国権論」へとたどる過程における、柴四期の思想の分析を行うことにこそ意義があると筆者は考える。^⑥

そして、『佳人之奇遇』初編が発刊された明治十八年という年代にも注目すべきである。前年十二月、朝鮮国で甲申事変が起こり、同十八年四月には、この甲申事変を経て日本と清国との間に天津条約が調印された。対外的緊張状態に置かれた日本国内では、自由党機関紙である『自由新聞』紙上においても「国権拡張論」が展開されたように、国内輿論が民権論から国権論の台頭へと移行し始めていた時期であった。^⑦ さらに同年、福沢諭吉は「脱亜論」を発表した。言うまでもなく、この時期は近代日本思想上の大きな転換期であったのである。

まさしくこの時期に、柴四期はいかなる思想をもって『佳人之奇遇』を発刊したのか。

従来、柴四期の思想が論じられる時、その周辺人物、および国内のどの勢力と関わっていくのかをみることによって、その把握はある程度可能となり、それは「国粹保存主義」、或いは「日本主義」とも位置付けられてきた。それに関しては筆者も異論はない。しかしながらそれは、柴の思想を既存の語に当てはめてあらわしたものでしかない。柴の思想の独自性を明らかにし、どのような思想の展開を経て、最終的にどこに行き着くのか。そしてそれが、近代日本思想史におい

てはいかなる位置付けが可能となるのか、を論じるところこそが必要である。

文学作品として評価しようとする立場から全く離れ、新たな視点で『佳人之奇遇』を分析し、柴四朗の思想を論じることが、近代日本における思想史の問題を考察していく上で意義のあることと筆者は考えている。

そこで本稿では、『佳人之奇遇』を素材として、柴の思想の核心となる国権論に注目し、『佳人之奇遇』にあらわれる柴四朗の思想を明らかにすることを試みる。

一、柴四朗の世界観

— 『佳人之奇遇』発刊以前 —

柴四朗は明治十二年（一八七九）から六年間、アメリカに留学している。『佳人之奇遇』執筆はこのアメリカ留学を契機とするものであったことは、柴がその「自叙」において次のように述べていることから明らかである。「多年客土ニ在リ、国ヲ憂ヘ世ヲ慨シ、千万里ノ山海ヲ跋涉シ、物ニ触レ事ニ感シ発シテ、和文、漢文、英文で書いたものが十冊余となった、これを帰国して六十日程で「集録削正シ、名ケテ佳人之奇遇」と題したとある。柴は滞米中にすでに執筆していた草稿をもとに、帰国後、『佳人之奇遇』初編を執筆し、その思想を世に問うたのである。したがって、柴がアメリカで何を学んだのか、留学体験を経ることでの思想にいかなる変化があったのか、ということとは重要な問題となる。

そこで第一章では、柴四朗が『佳人之奇遇』発刊以前に持っていた

世界観はいかなるものであったのかをまとめておくこととする。

（1）著者柴四朗と『佳人之奇遇』

まず柴の略歴を述べておく。柴の履歴は、前掲柳田書に詳しいが、ここでは新資料による若干の補足を行う。柴四朗は、会津藩士柴佐多藏由道の第四男で、嘉永五年（一八五二）十二月、安房国富津の会津陣屋で生まれた。父佐多藏は二百八十石の御物頭、格役黒紐に属する身分で、常に上下着用を許され大組物頭の指揮下にあった。四朗は、はじめ茂四郎といい、幼少の頃から多病であったという。会津で藩校日新館に学んだが、文久二年（一八六二）、藩主松平容保が京都守護職となるに及んで、父、長兄太郎と共に四朗も京に上った。

慶応四年（一八六八）正月、鳥羽伏見の戦いでは、十六歳の四朗も会津藩の一兵士として出陣した。帰藩後、会津藩で軍事顧問をしていた沼間慎次郎（守一）の塾に入り、フランス語を学んだ。やがて海外渡航を志し、会津藩派遣の留学生に決定したが、熱病のためにその機会を逸した。

やがて、明治政府軍の会津討伐となり、白虎隊に編成されていた四朗は、八月、病気をしておして城中に赴いたが、ここでも熱病のため戦闘には加わらず図らずも生き残った。九月二十二日、会津城落城、十月には猪苗代の収容所に移され、明治二年（一八六九）六月、四朗は父、兄と共に東京に護送された。翌三年には移封地斗南に移住、四朗は旧会津藩が斗南に設けた英語学校に学んだ。父を手伝い開墾に従事した時期もあったが、修学を志し函館にわたり、次いで弘前に出て東奥義塾に入るなど転々としながら学んだという。同六年末頃、会津に

窓 帰り日新館に学んだが、再び上京、やがて長兄太一郎の周旋で、横浜

税関長柳谷謙太郎の書生となった。ここで認められて同八年から十年までの三年間は学資の補助をうけて学業に専念することができたとい、この頃から新聞等に自らの論説を寄稿するようになった。

明治十年(一八七七)、西南戦争が起こると、山川浩が率いた別働第二旅団の臨時將校となり従軍した。柴四朗が戦況を報じた書簡は、新聞に連載された。この参戦が機縁となって、谷干城はじめ多くの人と知遇を得、岩崎家の援助を受けてアメリカ留学が実現することとなった。

同十二年(一八七九)一月、アメリカに渡った柴四朗は、サンフランシスコの商法学校(Pacific Business College) マサチューセッツ州のハーバード大学、フィラデルフィアのペンシルヴァニア大学のホワートン理財学校(Wharton School)で経済学を専攻、同十八年(一八八五)一月、Bachelor of Finance「理財学士」の学位を得て帰国した。留学中は学資を補うため、新聞通信等に従事したという。アメリカの一新聞が日本の条約改正に関して「無礼ナル無根ノ記事」を掲載した際、これに憤激した柴が新聞社へ談判に赴き、「墨器ヲ記者ニ擲テ大活劇ヲ演ジ」、警察に拘引されるも、終に新聞社に謝罪させたという逸話が残っている。帰国後は、アメリカで書きためた草稿を整理して同年十月、『佳人之奇遇』初編を発売した。

同十九年(一八八六)、最初の内閣に谷干城が農商務大臣として入閣すると、柴はその秘書官となり、谷の欧米視察旅行に随行した。翌二十年六月に帰国して谷が政府に意見書を提出し辞任すると、柴もそれに従い野に下る。

同二十一年には大阪に移り住み、主筆として『大阪毎日新聞』の改題発行を手がけ、政治雑誌『経世評論』の創刊に関わった。同二十五年二月、第二回総選挙で当選し福島県第四区代議士となり、以後大正期まで数期つとめた。

日清戦争後、同二十八年に三浦梧楼が公使として朝鮮国に赴任すると、それに柴は顧問として随行したが、閔妃殺害事件に関与したとして逮捕、投獄された。『佳人之奇遇』八編終巻十六は、広島島の獄中に繋がれた主人公散士の夢に金玉均等が現れて上海で殺された次第を語り、これに驚き目覚めた散士が、暗闇の中で巡視する警官の靴音と剣の響きを聞くところでその物語を終える。翌年、柴は無罪釈放された。

同三十一年、隈板内閣の成立に際して農商務大臣大石正己の次官をつとめた。

同三十三年、北清事変に際しては、柴は北京へ視察に赴き、援軍に従軍して一ヶ月北京に滞在したという。その帰路、満州に赴きロシア情勢を調査し、帰国後、対露同志会を組織した。同三十六年十一月『羽川六郎』という日露戦争未来記を刊行し、この書はヨーロッパの新聞に翻訳掲載されたという。同三十七年、日露戦争が起こると、満州方面へ数回視察に赴き、さらに樺太調査の命を受け従軍した。この従軍により従軍徽章を受けたという。戦後は、対露同志会を組織し、渡韓を重ね、日韓併合問題に奔走した。

同四十四年、辛亥革命が起こると、清国動乱視察の委員に挙げられ、南北の両総統(袁世凱、孫文)にそれぞれ会見し意見を交換したのは、委員中柴四朗唯一人であったという。以後は、大正四年(一九

一五) 大隈内閣で外務参政官になったのを最後に引退した。同十一年(一九二二)九月二十五日、七十歳で亡くなった。

新資料によって、衆議院議員となった後の柴の動向の一端が明らかとなってきた。柴四朗は、『佳人之奇遇』の著者としては有名であるが、その生涯を通じてアジアの問題に深く関与していた事実はあまり知られていない。この問題については今後も引き続き調査を進めていきたい。

さて、このような生涯を生きた柴四朗によって執筆された『佳人之奇遇』は、アメリカ留学中の主人公東海散士(柴四朗)が、二人の佳人(スペイン人幽蘭、アイルランド人紅蓮)と、一人の老志士(中国人范卿)と邂逅する場面から物語は始まる。彼等四人が抑圧されている民族の解放と国の独立のために奔走する中で様々な出来事が起こる。ほとんど全世界をその舞台とし、同時代の他の小説と比較してみてもそのスケールの大きさでは群を抜いている。そこには、主人公散士の見聞という形で、強大国(西欧列強)に抑圧され蚕食された弱小国の惨状が繰り返し描写され、それが衰頹、あるいは滅亡に至った所以が解き明かされている。その弱小国が陥っている惨状が、ひいては、現在及び将来の日本の姿を暗示していることを読者が意識して読むように、著者柴四朗によって意図されながら物語は展開して行く。「其頃佳人之奇遇といふ小説が出て字を読む程の者は読まぬ者になかった」と言われるほどに、当時よく読まれたのである。

すでに述べたように、『佳人之奇遇』は柴のアメリカ留学の所産であった。そこには自ずと著者柴四朗の現状認識、すなわち世界観が反映されているといえる。柴はアメリカ留学で何を得たのか。アメリカ

留学を経たことで柴の世界観に何らかの変化があったのか。それを留学前と留学中の各論説を取り上げて考察していくこととする。

(2) 留学前の論説―「東洋美人ノ歎」―

筆者は以前、柴四朗が『佳人之奇遇』発刊以前に抱いた政治思想がどのようなものであったのかを考察するために、「東海散士柴四朗の政治思想―政治小説『佳人之奇遇』発刊以前―」において、柴が当時の新聞、雑誌に発表した文章、論説をまとめた。以下、とりあげる論説の詳細については、これを参照されたい。

明治九年(一八七六)に『東京日日新聞』に寄せた「東洋美人ノ歎」という一文はその中の一つである。これは、後の『佳人之奇遇』を彷彿させるような内容と構成を持ち、柴の世界観の原型を考える上で重要な文章である。本文中に登場する「東洋美人蜻和」は日本、「西方貴公子」「西家富貴ノ遊治郎」は西欧列強になぞらえた暗喩の文章であり、ここには柴の日本対西欧列強という世界認識があらわれる。

内容をみていくと、日本が鎖国を解いて開国に至ったのは、西欧列強が「或ハ慰諭シ、或ハ恐嚇シテ、其志操ヲ動かサント」したためである。しかし開国するや日本は、「交通ヲ許スノ初ニハ、嫌悪ノ情甚ダ深カリシカトモ、彼ノ情繩ニ牽引セラレテ、嗜好日ニ密ニ愛恋愈々深シ」、「悉ク貴公子ノ風ヲ模擬セント欲シテ、衣服飲食ノ美ヲ尽シ、奇花異卉ヲ苑中ニ植テ、奇峯新池ヲ庭前ニ築キ、曲房高樓ヲ建テ、彼ノ少年輩遊治郎ト日夜相ヒ会セリ」と、初めは嫌悪していた西欧文明に心酔しその風を模擬することへのみ心を砕いている様を述べる。

その結果、日本は、「天性ノ美質ハ豹変シテ輕躁浮薄トナリ、務テ流
行ヲ逐ヒ外貌ヲ装ヒ、意氣揚々トシテ」、自ら「東洋中復タ我ニ及ブ
者ナシ」と奢る有様である。しかし現実には、「遊逸度ヲ失テ家財早
ク已ニ尽キ、負債山ノ如ク促債雲ノ如」くとなり、国家の財利は既に
尽き負債が嵩んでいるのであり、この状態を有識者（文中では乳母と
表現される）が次のように諫言する。

近來家財已ニ尽テ負債山ノ如ク殆ソド前途ノ活計ニ苦シメリ、令
嬢（日本：筆者註、以下同じ）ハ之ヲ是レ顧ミズ、浪リニ金銀ヲ
散シテ衣服ヲ飾リ情人（西欧列強）ト雅美ヲ競フト雖トモ、彼ノ
情人ハ富貴ノ公子ナリ、祖先傳來ノ家産甚ダ富メリ、令嬢豈ニ彼
ニ企及スベケンヤ、願クハ令嬢粧飾ヲ以テ念トスルコト勿レ、人
間ノ交際ハ只真情ヲ貴ブノミ、今ヤ令嬢ノ情人ニ於ル愛敬真情尽
ササル所ナシ、而シテ彼等ノ令嬢ヲ遇スル驕慢不敬薄情ノ跡、蓋
シ尠キニ非ズ、其心中モ亦往々信ズベカラザル者アリ、（中略）
今ニシテ外形粧飾ノ費ヲ省キ、精神ノ培養ニ其力ヲ尽サズンバ、
恐クハ言フニ忍ビザルノ害ヲ生ゼン

しかし日本は、西欧列強に対し「交遊飲逸初メニ異ナラズ、是レヨ
リ身体益々虚弱ニ、精氣愈々衰ヘテ、黴毒皮膚ニ顯ハレ形容枯槁」
し、「迷惑ノ甚シキ日ニ紅粉ヲ粧テ以テ皮膚ノ黴毒ヲ隠シ、美服ヲ着
シテ以テ腰圍ノ骨立ヲ飾リ、媚ヲ呈シ愛ヲ送」るのである。実は「彼
ノ少年輩遊治郎ハ、羊裘ヲ衣テ其心ハ豺狼ノ諺ノ如ク、外ニハ恋着愛
憐ヲ表シテ、内ニハ貪戻情慾ヲ恣ニシ、蜻和ノ田畝家財ヲ掠メ去ラン
トスルノ企」を抱くものであることを知らうともしないでいる。「是
レ蜻和（日本）ガ斯ノ如キノ苦界ニ沈ミシ所以」である。醒めてみれ

ばこれは夢であったが、胸中には悲哀の念が残る、「因テ夢ヲ記シテ
以テ東洋美人ノ歎ト云フ、亦タ区々ノ寓意ナキニシモ非ザルナリ」と
結んでいる。

柴は、西欧列強による侵略の危機を顧みず、皮相の欧化に走る日本
の現況を案じ、その国家衰亡の危機的現状認識のもとに日本の行く末
を悲嘆しているのである。

これは一例であるが、留学前の柴四朗の論説に共通して見られるこ
とは、柴の興味関心は国家の衰頹、滅亡に至る原因を明らかにするこ
とにあるということである。ただし、この時点での柴は、その世界認
識からみた日本に迫る危機を警告し、日本のとる欧化主義の非を指摘
しはするものの、その状況を悲憤慷慨するのみにとどまっている。さ
らに論を進めて、では具体的に日本はその世界にどのように対峙すべ
きなのか、その状況を回避する具体策を提示するまでには及んでいな
いことが指摘できる。

(3) 留学中の論説―保護貿易主義―

次に、アメリカ留学中の柴四朗の論説にはどのようなものがみられ
るのか。柴のこの時期の主張は、アメリカから日本の経済雑誌『東海
経済新報』へ寄稿した十八編に及ぶ論説にみることができ^⑧。

『東海経済新報』とは、明治十三年（一八八〇）八月に創刊された
経済雑誌で、月三回発行された。社説、奇書、記事、統計欄とがあ
り、毎号四十頁余り、東海社発行で犬養毅が主宰した。明治時代前期
における保護主義か自由主義かとの貿易政策をめぐる論争において、
同誌は保護貿易を主張し、自由主義経済を標榜する田口卯吉が主宰す

る『東京經濟雜誌』とは屢々論争を交えた。

柴の一連の論説は、一貫して保護貿易によるアメリカの繁栄を報告し、イギリスの自由貿易を批判する立場で世界經濟を論じるものである。とくにイギリスの圧政によって、抑圧され疲弊衰弱する国々の実態を強調している点が柴の論説の特徴である。

例えば、明治十四年六月の「貿易論」では、柴の保護貿易論が展開される。そこでは「英国ノ利己主義ニ強制セラレテ稅權ヲ褫奪セラレタル弱國」として「日本」、「土耳其」、「南亞ノ諸州」、「西印土諸島」、「英領各地」が挙げられて、イギリス自由貿易の非が論じられる。そしてとくに、アイルランドがイギリスの自由主義政策のために受けた被害を説き、徹底したイギリス批判を行うのである。

さらに、同十五年六月の「海關稅論并ニ英國ノ政策ニ及フ」でも同様に、イギリス自由主義政策への批判を行う。その中で日本国内の様子に触れて、「往々自由貿易ト人文ノ自由トヲ誤解シ、英國ノ宰相グラドストン氏ハ自由貿易主義ノ人ナルヨリ、自由ノ文字ニ拘泥シ、揚々トシテ同氏ノ説ヲ引テ以テ我日本ノ危機ヲ顧ミサル惑溺論者アリ、我輩豈其迷夢ヲ醒シ、英國ノ商業政略ハ、保守党ト云ヒ、自由党ト云モ、其甚タ異ナラサルヲ知ラシメン」と、日本にいたずらに「自由」の文字に拘泥し、日本の危機を顧みず自由貿易をとろうとする「惑溺論者」があることを警告している。

イギリスに代表される西欧列強が、その政策を強制して弱小国を抑圧し疲弊衰弱させている、柴がそのような構図で世界情勢を把握していたことが、これらの論説によって明らかとなる。日本も同様に衰弱し滅亡に至ることがあってはならず、その危機を柴はアメリカから日

本への寄稿論説という形で発し続けた。留学前と異なるのは、アメリカの繁栄を実見しその教育を受けた柴は、保護貿易という具体的政策論を展開させるようになっていたという点である。

先に述べた通り、そもそも柴四朗は、国家が衰弱、滅亡に至る原因の解明に深い関心を寄せていた。アメリカ留学中の見聞は、留学前の柴が捉えていた世界観、すなわち西欧列強に侵略されようとしている日本という単純な図式から、より世界的規模にその視野を広げさせることとなった。それは、強大国（西欧列強）対弱小国（アジア諸国）という構図で世界情勢を捉えさせることとなったのであり、柴独自の世界観を確立させていくことになった。また、経済学という実践的學問を学んだことによって、柴の政治意識がより補強されていったと考えられるのである。

柴が『東海經濟新報』への一連の寄稿論説を執筆していた時期と、『佳人之奇遇』の素案を練っていた時期とはほとんど重なる。柴は、経済の実況報告がその主たる目的となる経済雜誌への寄稿だけでは飽きたらず、自身のより政治的な思想を発露するために、『佳人之奇遇』草稿を書きためていった。『佳人之奇遇』は、柴が自ら捉えた世界情勢の構図の矛盾を解き明かすために執筆されたのである。そして柴は、その危機は日本の目前にも迫っていると認識し、日本の現状と将来を憂えた結果、日本の進むべき前途を示すため、自らの政治論説を小説という形をかりて表明したのである。柴はすでにその自叙で、読者の批評は関する所ないと述べており、その文学的評価は必要としないことが明らかである。^⑤

二、「佳人之奇遇」における「自由」

それでは、『佳人之奇遇』で柴四朗は何を論じているのか。『佳人之奇遇』が発刊されるや、当時の人々に熱狂的に読まれたのは、「自由」をよく標榜したからという。柴が説いた「自由」の本質とは何であつたのか。「自由」というキーワードをもとに『佳人之奇遇』を読み解くことによって、柴四朗の思想の本質が浮かび上がってくるのである。そこで第二章では、『佳人之奇遇』における「自由」という語に拘って、そこから明らかとなる柴四朗の思想の問題について検討していきたい。

本章では、柴のアメリカ留学中にその素案が成つたとみられる初編（巻一卷二）、二編（巻三巻四）に限り取り扱い、また、敢えて小説の筋を追うことはしないことを予め断っておく。アメリカ留学を経ることによって形成された柴の世界観は、どのような形でその著作に反映されたのか。留学を終えた時点で一気に書き上げられたこれらの編を分析することによって、この段階での柴の思想の特質を把握してきたいと考えるからである。

(1) アメリカの「自由」—アメリカ観—

柴はその眼で捉えたアメリカをどのように描いているのか。まずはじめに、そのアメリカ観を把握することで、柴によって「自由」の語がどのような使われ方をしているのかを明らかにしたい。

主人公東海散士がフィラデルフィアの「独立閣」に登り、自由の破鐘を見て感慨を抱いているところ二人の佳人に出逢うという、

『佳人之奇遇』の冒頭部から早くもそれは描かれる。

東海散士、一日費ヒラゲルヒヤ 府ノ独立閣ニ登リ、仰テ自由ノ破鐘イシゲメンデント・ホル 吹

米ノ大事アル毎ニ鐘ヲ撞テ之ヲ報ス、始メ米國ノ独立スルニ當テ吉凶必ス閣上ノ鐘ヲ撞ク、鐘遂

ニ裂ク、後人呼テ自由ノ破鐘ト云フヲ観テ独立ノ遺文ヲ読ミ、当時、米人ノ

義旗ヲ挙テ英王ノ虐政ヲ除キ、卒ニ能ク独立自主ノ民タルノ高風

ヲ追懐シ、俯仰感慨ニ堪ヘス、愼然トシテ窓ニ倚テ眺臨ス、会々

二姫アリ、階ヲ繞テ登リ来ル（巻一）

ここで散士が感慨を抱いて追懐しているアメリカ人の「高風」とは、イギリスによる虐政支配から義旗を挙げて自ら脱し、今に至って「独立自主ノ民」たることを保っていることである。

また独立戦争時のアメリカは、「当時英王ノ昌披ナル、漫ニ国憲ヲ蔑如シ擅ニ賦斂ヲ重クシ、米人ノ自由ハ全ク地ニ委シ、哀願途絶ヘ愁訴術尽キ、人心激昂干戈ノ禍、殆ト将ニ潰裂セントス」状態であり、イギリスによる虐政支配によってアメリカ人の「自由」は全く顧みられることがなかったと描写される。

「独立ノ檄文」、つまり「自由ノ大義」が天下に明表されると、民は「傷テ撓マス死シテ悔イス、誓テ自由ノ為メニ斃レ、百万虎狼ノ英軍ニ抗シ、兵結テ解ケサル」様であり、その独立戦争の戦闘場面が劇的に描写される。アメリカ人がその苦闘を経て、遂にイギリス軍に勝利したのは、「氣高ク志遠ク、国家ノ難ヲ急ニシテ私身ヲ忘レ、偏ニ報國ノ道ヲ尽サンコトヲ願」ったからであつたと述べる。その結果、

宜ナル哉、米人ノ能ク頽勢ヲ挽回シ、凱歌振旅シテ馬ヲ華山ノ陽

ニ帰シ、牛ヲ桃林ノ野ニ放チ、而シテ外ハ歐人カ隣國犯掠ノ政略

ニ対スルニ、強ヲ挫キ弱ヲ護ルノ公議ニ拠リ、内ハ庠序ヲ建テ、

銓鑄ニ換へ、工商ヲ励マシ農桑ヲ課シ、此富強文明ノ邦国ヲ作シ、人ハ自由ヲ樂ミ民ハ太平ヲ謳フニ至ル、所謂凱歌ノ声風雲ノ色ヲ動カシ、兵氣銷シテ日月ノ光ト為ルモノナリ(卷一)

と、アメリカの現在の繁栄ぶりが描かれる。ここでは、アメリカ人が「自由」のために戦い、勝利した結果、富強文明の国、すなわち人民は自由を樂しみ太平を謳歌し現在の繁栄を獲得した理想国として、柴がアメリカを捉えていることがわかる。^⑧

さらに、アメリカの繁栄及びそれへの称賛は、主要登場人物の一人であるスペイン人幽蘭によってメキシコの国情と比較して語られるという形で示される。

共和ヲ以テ民政ヲ建テ、文物粲然富強駁駁トシテ見ル可キモノ、只北米合衆国アル而已、抑北米ノ人民ヤ本自主自由ノ風ニ生長シ、明教良法ノ雨ニ沐浴シ、能ク私心ヲ捨テ、公議ヲ執リ、論理ニ泥マシテ実業ヲ務ム、是レ能ク民政ヲ建テ、宇内ニ冠タル所以ナリ、我(スペイン)民ハ則チ然ラス、論理ニ泥テ実業ヲ務メス、輕跳ニシテ銳進シ、亦忽チ挫折ス、墨西哥国ハ米国ト境ヲ接シ、齊ク共和ノ民政ヲ建ツルノ国ナリ、然レトモ朋党相忌ミ首領相仇シ、爾来五十有三年間ニシテ、一帝一摂政統領五十三人ヲ更ヘタリ、此ノ如キ朝迭暮更ノ政府ノ下ニ棲息スル生民、焉ノ能ク進路ヲ文明ノ境ニ尋ネ、生路ヲ自由ノ郷ニ求ムルヲ得ヘケンヤ、墨西哥人ハ我西班牙ノ後裔ニシテ風教人情亦相同シ、亦以テ自ラ鑑ムルニ足ルヘシ、殊ニ我文物典章ヨリ国民ノ志操ニ至ルマテ遠ク米人ニ及ハス(卷一)

と、アメリカ人が「自主自由」、「明教良法」の風土にあって、私心

を捨て公議をとり論理になじまず実業に務めるということが、よく民政を建て、宇内に冠たる所以であると説く。それに比べ、同じく共和制をとりながらメキシコは、その文物典章より「国民ノ志操」に至るまで、遠くアメリカ人には及ばないと述べるのである。^⑨

アメリカに六年間留学した柴四朗によって描かれるアメリカは、その人民の力(武力)で強国イギリスの虐政支配から脱し、「自由」を得るに至った富強文明、自主自由の理想国である。

柴留学当時の日本国内では、理想化されたアメリカ観とそうでないものとの両極のアメリカ観が存在していた。^⑩しかしながら、柴の場合には、先にみた『東海経済新報』への寄稿論説によって、その留学時に、アメリカの活気ある社会状況を実感していた様子がうかがえる。

柴はアメリカにおいて経済学を学ぶ者としての視点で、経済的な繁栄を得た国としてのアメリカの社会、風土を実見した。これが柴に前向きな理想化されたアメリカ観をもたらすことになったとみられる。

そして柴がアメリカ人の気風を慕い称賛するのは、一旦は強国イギリスによって奪われた「自由」を、人民の力で再び獲得し今の繁栄に至っているからである。人民の力とはすなわち武力であることに注意したい。ことさらに筆を尽くして戦闘場面が描写され、当時の英雄が称讃されるのは、柴の関心はそこにこそあったからである。

柴によって捉えられたアメリカは、「自由」という言葉を伴って語られる理想国であった。「自由」の文字は『佳人之奇遇』冒頭部から印象的に登場し、とくに初編においては頻繁に用いられる。このためか『佳人之奇遇』を、自由民権を標榜した政治小説、と安易に説明さ

窓
れてしまう事例が現在においてもしばしば見受けられる。⁹⁾しかし、こ

史
ここで柴の用いる「自由」とは、イギリスの虐政、抑圧に対するアメリカ
カ一国の自由であり、自由民権運動のそれとは異なることに注意して
おかなければならない。

柴が捉えている「自由」の意味について次節でさらに検討を加えて
いくこととする。

(2) 「自由」の誤解—日本の現状と将来の姿—

さて、柴が『佳人之奇遇』を執筆した真の目的は、西欧列強が優勢
である世界において日本はどのように対峙すべきかという命題のもと
に、日本が独立国家として進むべき前途を提示することにあつた。理
想国アメリカに比べて我が日本の状態は如何、と日本のことに論は及
ぶ。柴は日本の現状をどのように認識し、将来在るべき姿をどのよう
に考えていたのか。ここでも、「自由」の語がキーワードとなる。

まず、主人公東海散士によつて幕末維新期が回顧される部分であ
る。

屈指回顧スレハ二十年前、我国欧米各邦ト締盟セシニ当テヤ、尊
王攘夷ノ説紛トシテ起リ、慷慨悲歌ノ士、幕府ノ専横ヲ憤リ俗吏
ノ偷安ヲ慨シ、一死邦ニ報ヒント臂ヲ揮ヒ呼号スルニ当テヤ、恨
ヲ幕府ニ抱クノ士、乱ヲ好テ無為ニ苦ムノ徒、機ニ乗シテ良民ヲ
煽動シ公卿ヲ誘惑シ、深謀遠識ナク宇内ノ大勢ヲ知ラス、徒ニ螻
螂ノ斧ヲ以テ欧米ノ兵ヲ攘ハント擬シ、深夜外館ヲ襲ヒ火ヲ放チ
剽掠ヲ極メ、白日路上不意ニ起テ無辜ノ外客ヲ枉殺シ、以テ匹夫
ノ勇ニ誇リ以テ神州ノ恥ヲ雪ムルトシ、児戯輕佻怯弱殘暴、言フ

ニ忍ヒサルモノアリ(巻二)

と、深謀遠識ない尊王攘夷の士の「匹夫ノ勇」を非難する。散士が幕
末の状況をまず回顧するのは、明治十年代の現状と幕末の状況を結び
付けて説こうとしているからである。

そしてここに至って、

外人憤怒シ兵威ヲ以テ相劫カシ、我海岸ニ寇シ我藩籬ヲ乱シ、我
国権ハ彼ノ殺ク所トナリ、我威力ハ彼ノ凌ク所トナリ、神州ノ陸
沈命脈ノ絶ヘサル、一線ノ千鈞ヲ懸クルカ如シ、外人ノ跋扈跳
梁、殆復制ス可カラサルニ至ル、然シテ其原ヲ尋ヌレハ幕府ノ失
体ヨリ起ルト雖モ、当時慷慨自任セシ士人ノ躬親招ク所ノモノ多
キニ居ル、其瘡ヤ深ク其痍ヤ大ニ、瘡痍未タ全ク癒ヘス、国辱未
全ク雪メス、慷慨有志ノ士ノ深く当年ヲ浩歎スル所ナリ(巻二)

と、外国人の武力によつて「我国権」が殺がれ、「我威力」が凌が
れ、「外人ノ跋扈跳梁」は制することができないものとなつてしまつ
たと幕末日本の状態を説く。そしてその「瘡痍未タ全ク癒ヘス、国辱
未全ク雪メス」というのが、現状であると述べる。

さらにその日本を取り囲む世界情勢は、次のように描写される。

今ヤ外人禍心ヲ包蔵シ神州ヲ蔑視シ、清ハ狼ニ自ラ尊大、我ヲ輕
シテ隣交ニ信ナク、俄独ハ勢威ヲ頼テ驕傲シ、英仏ハ狡智ニ老ケ
テ蕩逸シ、我ニ飲マシムルニ美酒ヲ以テシ、我ニ贈ルニ翠羽ヲ以
テス、其酒其羽往往鳩毒ノ製スル所、我士民之ヲ受ケテ而シテ未
疑ハス、所謂此毒藥ヲ甘餐シ、猛獸ノ爪牙ニ戯ルモノナリ、只恐
ル邦ノ為メニ侮ヲ取ランコトヲ、且彼口ニ仁義ヲ誦シテ、而シテ
桀虜ノ行アリ、表ニ天道ヲ説テ、裏ニ豺狼ノ慾ヲ懐ク、亜細亜北

部ハ疆俄ノ為メニ并セラレ、南方印度ハ英王ノ臣妾トナリ、安南ハ仏国ニ隸属シ、土耳其、清国モ亦萎微、既ニ已ニ亡滅ノ運ニ傾ケリ、嗚乎、鯨鯢浪ヲ蹴テ東洋ヲ縦横シ、豺狼食ヲ求メテ戸外ヲ窺フ、仰テ殷鑑ヲ覽テ千歳ノ憂ニ堪ヘサルナリ（巻二）

と、柴が認識する世界情勢の構図、すなわち西欧列強によるアジアへの侵略の様子が強調され明示される。

このような憂うべき世界情勢に照らして我日本の人民の有様は如何、といえ、

我人民、開明ノ域ヲ愛シ自由ノ里ヲ慕ヘトモ、之ニ達スルノ道ニ迷ヒ、腐言邪説取捨スル所ナク、枉ヲ矯メ却テ直ニ過キ、祖宗百年ノ良法ヲ破毀シ、工農数世ノ組織ヲ撲滅シテ顧慮スル所ナク、輕佻浮薄強弁ニシテ能ク談シ、米ヲ模シ欧ヲ擬シ、徒ニ理論ニ奔テ実業ヲ勉メス、政令ニ抗シテ自由ノ伸暢ト誤リ、横議罵詈訃テ民権ノ朋党ト誇リ、以テ世俗ノ好ニ投シ誉ヲ当世ニ求メンコトヲ務メ、後世識者ノ譏ヲ顧ミス、虚ニ吠ヘ臭ヲ逐フノ徒、靡然饗応シ、土風壞頹、徳義地ヲ払ヒ、朝ニ民権ヲ主唱セシ者、夕ニ官権ヲ呼号シ、甘シテ轅下ノ駒トナリ、士ニ常操ナク、議ニ確論ナシ

（巻二）

と、「士風」の乱れ様を連ねて、「志士之ヲ見テ心ヲ傷メ、旧老之カ為メニ流涕ス」と歎じる。

ここで柴が、日本人は「開明ノ域」を愛し、「自由ノ里」を慕っているのに、これに達する「道」に迷っていると説いていることに注意しなければならない。その「道」に迷っている日本人は、「祖宗百年ノ良法」を捨てて、欧米を模倣し理論に走り、実業を勉めていないと

批判する。柴は『佳人之奇遇』を著す中で、まさにこの迷いを解き、日本人を正しい（と柴が考える）「道」へと導びようといっているのである。

そこで、政令に抗することが「自由ノ伸暢」であると誤解して「横議罵詈訃テ民権ノ朋党ト誇」る者がある、と述べるように、柴にとっではいわゆる自由民権論者の過激な行動は、批判の対象であったことが明らかである。

この「自由」に対する誤解という点は、柴の述べる「自由」への理解として重要である。前章ですでに述べたが、柴は『東海経済新報』への寄稿論説の中で、日本には徒に「自由」の文字に拘泥する「惑溺論者」があるという警告をしていたことがあった。柴にとって、「自由」の意味は注意されるべき問題であった。『佳人之奇遇』二編巻三において、再びこの問題が論じられている。

散士がポーランド滅亡の所以を説く箇所に、「自由ノ誤解」についての論がある。ポーランドは、「徒ニ下民ヲ抑制シ、内乱ヲ鎮圧スルヲ勉メテ、外競ノ大計ヲ遺シ、国権地ニ委シ、今日亡國ノ惨状ヲ來」した。しかし、もう一つ散士の考える重大なその滅亡の所以がある。

それは、「抑彼（ポーランド）民ヤ、自由ノ理ヲ誤リ、一身ノ自由ヲ以テ無上ノ自由ト為シ、国家独立ノ自由、更ニ貴キヲ悟ラス」というものである。そして散士は、「自由ノ誤解、豈深ク鑑ミサル可ケンヤ」と言い、ポーランド滅亡はその人民の「自由ノ誤解」が引き起こしたものであると断じる。ここで、一身の「自由」よりも国家独立の「自由」を優先すべきであるという、柴の「自由」に対する見解が明らかとなる。そのことを顧みずに「自由ノ誤解」をする者、つまり一

窓身の「自由」のみを主張する者は、柴にとっては否定されるべきものであったのである。

史 話を明治日本の現状に戻すと、柴はさらに次のように述べる。「賦税年ニ多キヲ加へ、而シテ民力未伸ヒス、中央集権重キニ過キ、地方其鈎ヲ失ヒ、帝京ニ非サレハ事ヲ起シ名ヲ挙クル能ハス」と、士は「官途ニ狂奔」し、民は「窮路ニ怨泣」し、日本人は皆「漸ク大計ヲ遺レントス」と説く。

その「大計」とは何か。

日本固有ノ国権ハ欧人ノ為メニ奪ハレ、吾人幸福ノ利ハ外商ノ為メニ殺カル、ヲ、散士ヲ以テ之ヲ見レハ、方今焦眉ノ急務ハ、十尺ノ自由ヲ内ニ伸ハサンヨリ、寧ロ一尺ノ国権ヲ外ニ暢フルニ在リ(卷二)

これは『佳人之奇遇』の中で最も有名な一文とされるところであり、柴の主張の集約である。ここでいう国内に伸ばす「自由」は、人民の自由であり権利、すなわち人権であり民権と言ひ換えることができよう。柴は、内に民権を伸ばすより先に外に国権を伸ばすべきである、との立場を表明する。何故ならば、柴にとって貴い「自由」とは、一身のそれよりも国家独立の「自由」であり、その理解のうえで、「自由」という言葉を捉え用いているからである。

柴はさらに論を進めて、「此大難ヲ救済挽回スルノ策、果シテ如何セン」として具体的政策を次のように提示した。

上下小怨ヲ棄テ、旧悪ヲ捨テ、私心ヲ去テ、公議ニ従ヒ、游員ヲ去リ冗費ヲ減シ、内結外競ノ志操ヲ励マシ、国権恢復ヲ以テ各自任シ、国家ノ盛運ヲ以テ自期シ、外人ノ移住ヲ奨励シ外国ノ資本

ヲ利用シ、古米国人カ漫ニ官爵ヲ重シテ天爵ヲ輕シ、清貧ニ傲テ商利ヲ賤ムノ陋習ヲ破リ、農桑ヲ課シ工商ヲ進メ、海運ヲ隆盛ニシ以テ沿海ノ航権ヲ保護シ、鐵路ヲ縦横ニシ以テ内地ノ交通ヲ便ニシ、四民心ヲ一ニシ耐久努力セハ、厄運漸ク去リ、自由始メテ伸ヒ国家ノ富強文明ハ期シテ待ツヘキナリ(卷二)

ここでも一貫しているのは、国権恢復をもって第一義とし、そうすれば自由は自ずから伸び、日本も富強文明の国家となるとういう主張である。

日本はこのような「大難」を「挽回」していかなければならないのに、今日の国内においては、

我国ノ士人志遠大ナラス、多クハ小成ニ安シテ、歌舞遊蕩、囲碁抹茶ニ耽リ、畫骨骨董ヲ玩ヒ、以テ一日ノ富貴ヲ偷ミ、唯一二州人ノ歡心ヲ得ルヲ務メ、私怨ノ為メニ公道ヲ忘レ、情義ノ為メニ庸人ニ任ス、米人カ能ク私心ヲ捨テ公議ニ拠リ、国家ノ為メニ尺スノ心肝ニ照セハ、天淵モ畜ナラス、吾人実ニ忸怩スルニ堪ヘサルナリ(卷二)

と、日本の士人の志の遠大でないことを、アメリカ人の心肝に照らせば忸怩するに堪えない、「是レ散士カ日夜胸臆ニ積テ、国家前途ノ大計ノ為メニ悵憤懣スル所以ナリ」と結ぶのである。柴はその留學中、繁榮し理想国とみなすアメリカに自ら身を置きながら、日本をこのような思いで見えていたのであった。

その一方で、柴には将来在るべき日本の姿も捉えられていた。それは、スペイン人幽蘭が散士に、これからの日本の使命を説く言葉の中に示されている。

方今東洋大ニ為スヘキノ秋ニ当リ、牛耳ヲ執テ亜細亞ノ盟主ト為リ、東生民倒懸ノ難ヲ解キ、西英仏ノ跋扈ヲ制シ、南清人カ陋習ヲ壊リ、北俄人ノ覬覦ヲ絶チ、歐洲諸邦カ東洋ヲ蔑視シ内治ニ干渉シ、遂ニ之ヲ内屬ト為サントスルノ政略ヲ拒キ、彼億兆ノ蒼生ヲシテ初テ自主独立ノ真味ヲ嘗メ、文物典章ノ光輝ヲ発セシムル者ハ、貴国（日本）ニ非スシテ其レ誰カ之ニ当ラン（卷二）

つまり、東洋の重大な時期において、その牛耳をとってアジアの盟主となり、アジア諸国に「自主独立ノ真味ヲ嘗メ、文物典章ノ光輝ヲ発セシムル」ということが日本の将来の姿であると、柴はみているのである。日本がアジアの盟主となるという主張は、留学前の柴の論説には見られなかったことであるが、柴のこの思想はどこから出てきたものか。この点については後章で述べたい。

ともかくここで明らかとなったのは、柴四朗によって「自由」という言葉が用いられる時、それはあくまでも一国の自由（＝国権）を指すのであって、一身の自由（＝民権）を指すのではないということである。大国の抑圧、強制によって一国の「自由」が奪われることは、柴にとっては何よりも許されざることであった。その危機感、日本を離れ外国に身をおくことよって、ますます切実なものとなり現実味を帯びたとみられる。柴にとって、一国の自主独立の「自由」は何よりも貴いものであった。それにも関わらず、日本は幕末期から外国によってそれは殺がれたままであり、未だに一国の「自由」、すなわち「国権」を恢復していないのである。日本が今なすべきことは、外国権を伸ばすことであり、奪われた一国の「自由」を恢復することである。それを何よりも優先させるべきである、というのが柴の主張

であり、「民権」の語は、その主張にあらわれることはなかった。このような柴の「国権」思想の根拠はどこに求めることができるのか。次節でその考察を進めたい。

(3) 一国の「自由」―「国権」思想の根拠―

『佳人之奇遇』全編において、一国独立の問題は世界各国の事例を通じて論じられる。それは柴四朗の「国権」思想に基づいた論旨で展開される。とくに初編では、登場人物であるアイルランド人によって、アイルランドに対するイギリスの抑圧虐政支配の様子が語られる言葉の中にそれがあらわれる。

初メ英王詐術ヲ用キテ、我王ヲ欺キ我民ヲ詐リ、陽ニ聯邦相助クルヲ約シテ、陰ニ之ヲ併呑シ、名ハ聯邦タリト雖モ、実ハ臣妾タルニ過キス、爾來英蘇相謀リテ、我國ノ繁盛ヲ嫉ミ、我富強ヲ忌ミ、苛法虐制到ラサル所ナク、我工業ヲ窘メ、我製造ヲ蹙メ、我貿易ヲ害シ、我結会ヲ妨ケ、我教法ノ自由ヲ奪ヒ、我出版ノ自由ヲ禁セリ（卷一）

と、「英国ノ虐政ニ審メラレ、国権憲法ノ自由ヲ殺カレ」たアイルランドの惨状が筆を尽くして語られる。

イギリスの外交政略は、「談笑ノ間ニ劔ヲ含ミ、杯酒ノ中ニ鳩ヲ灑キ、狼レルコト山羊ノ如ク、貪ルコト豺狼ノ如シ、親ム可カラサルナリ」といい、

若シ一タヒ彼四海兄弟自由交通ノ甘言ニ欺カレ、彼ト自由ニ貿易シ彼干渉ヲ招クトキハ、其邦国（土耳其、印度、埃及、諸州）ハ漸次ニ生齒減シ国力疲レ、国ニ独立ノ名称アルモ独立ノ実力ヲ

キ、年年歳歳貿易鈞ヲ失ヒ金宝ヲ輸出スル、名ハ入貢ニ非スト雖モ、実ハ国民ノ膏血ヲ絞テ以テ英国ニ貢スルニ異ナラサルナリ、然ルニ世ニ空理ニ迷ヒ英人ノ術中ニ陥テ之ヲ曉ラサル者少カラス、真ニ浩歎ニ堪ヘサルナリ(巻一)

と述べる。これは前章でみた『東海経済新報』への寄稿論説と同様の論旨で、イギリスとの自由貿易は実はイギリスへの「入貢」であると糾弾する。アメリカの経済学を学び、イギリスの自由貿易を批判する柴の論説は『佳人之奇遇』でも存分に展開されたのである。

イギリスの支配に対してアイルランドは、「勢弱ケレハ、則制ヲ巨制ニ受」け、「愛蘭ノ議士皆奮テ信向ノ自由ヲ称シ、独立立法ノ正理ヲ唱フルト雖モ、常ニ少数ノ故ヲ以テ、大英国議院ニ敗ヲ取ルコト、茲二百有余年、嗟乎、權威太峻ニシテ民命何ソ堪ヘン」という状態にあった。

そこで柴は、「自由」を奪われたアイルランド人志士が期する所として、「將ニ天ノ一国ニ賦与スルノ大義ニ抛リ、英人ノ羈絆ヲ脱シ、我民人ノ掠奪セラレタル権理ト財産田土トヲ回復シ、急征暴斂ノ弊ヲ矯正シ、下民塗炭ノ苦厄ヲ救助セント欲スルニ在ルノミ」と述べる。ここで、奪われた国権は、天が一国に賦与する大義によって恢復されるべきであるとの柴の見解が示される。

この見解は二編においても、アイルランド問題に関連させて「一国ノ独立ハ天ノ賦与スル所、人間ノ通義ハ他人ノ犯ス可カラサルモノナリ」(巻三)と繰り返され、「而シテ英人兩ナガラ之ヲ犯シ、我愛人ヲ遇スル禽獸モ畜ナラス」(巻三)とイギリスを批判するのである。この場合の天とは、伝統的な天、または天道という超人間的權威の

思想によるところの天をさすとみられる。その天賦の権利としての独立、天賦の大義による国権恢復の主張である。柴の盟友馬場辰猪は『天賦人權論』を唱えたが、天賦人權論ならぬ「天賦国権論」が柴の立場である。柴四朗の国権論の根拠は、この「天賦国権論」にあった。国が独立するためには、まず奪われた国権を恢復することが必要であり、それは天が一国に賦与している大義によるのである、との脈絡で、柴は理解し主張したのである。

柴によって描き出された現実の世界情勢は、「今夫レ強ハ弱ヲ窘メ狡ハ朴ヲ欺キ、世人見テ怪ムコトナシ」というものであり、それを「豈之ヲ開明ノ域、人文ノ世ト称ス可ケンヤ」と歎じる。さらに、「欧人貪慾厭クナク蚕食日ニ甚タシク、随テ東洋ノ勢愈々危」いのであり、柴の認識した世界にみえるこうした趨勢は、天が一国に賦与している大義によって修正されなければならないのであった。

『佳人之奇遇』における「自由」とは、他国によって奪われた国権を、天が賦与するところの大義によって恢復し、獲得すべき一国の「自由」であった。この点において、『佳人之奇遇』に出現した「自由論」は、当時の自由民権運動の影響をうけた政治小説のそれとは一線を画するものであったといえよう。日本を離れ一人で外国に身を置いた柴が、世界を俯瞰して見た時、その眼には不当に「自由」が奪われている国々が映った。そこから世界的視野で恢復すべき「自由」の意味を思った時、それはまず天賦の大義による一国独立の「自由」であった。そしてそれは、日本国内のいずれの勢力にも属していない立場から語られた「自由」であった。もちろんこの思想の背景にあるものは、柴の出自、過去の体験を抜きにしては語れないだろうが、こ

の「國權」思想を特質づけている大きな要素の一つは、国外に身を置いた遊学者柴四朗の特異な立場にあったと考えられるのである。

三、柴四朗の思想

『佳人之奇遇』には世界各国史が叙述されるが、そこに大國の歴史はほとんど登場しない。柴が共感を寄せて、その歴史を描写するのは、大國に虐げられた小國の獨立運動史である。たとえば、イタリヤのガリバルディ (G. Garibaldi 1807~1882) による民族統一運動、世界初の黒人共和國となったトウサン・ルーヴェルチュール (T. Louverture 1743~1803) 率いるサントドミンゴの戦い、「エジプト人のエジプト」を恢復するためのアラビー・パシャ (A. Pasha 1839~1911) によるイギリスとの戦い、ハンガリーのコシュート・ラヨシ (K. Lajos 1802~1894) による獨立戦争のそれなどである。それぞれの事例がどのように柴の関心をひき分析されているかは、別の機会に論じたいが、これらに共通するのは、いずれも大國によって奪われた國權を恢復すること、その一國獨立への闘争史に主眼を置いた描写となっている点である。柴の姿勢はその点において、『佳人之奇遇』全編を通して一貫していた。

第三章では、前章と同様に『佳人之奇遇』を素材として、巻を追って柴の國權論の帰趨を探るとともに、その最終巻が発刊された明治三十三年当時までの柴四朗の思想について述べてみたい。

(1) アジアにおける日本

前章で述べたように、柴が描く日本の将来の姿は、東洋において日

本が「牛耳ヲ執テ亜細亞ノ盟主ト為」り、アジア諸國に「自主獨立ノ真味ヲ嘗メ、文物典章ノ光輝ヲ發セシムル」ことであった。柴の留学前の論説には、このような発想はみられなかった。この思想はどこからきたものか、そしてどのように展開していくかを考察していきたい。

柴四朗がアメリカで、どのような人物と関わり、どのようなテキストで教育を受けたのか、この問題は柴四朗の思想を考えるにおいては必要不可欠ではあるが、その詳細については別の機会に譲りたい。しかしながら、柴にはアメリカ留学中に次のような実体験があった。これが、日本がアジアの盟主となるという発想を柴に抱かせることになった経緯を考える上で、手掛かりとなり得るのではないかと考えられるのである。

前掲『東海經濟新報』への寄稿論説の内に、明治十四年九月の「紐育府本邦商業の報知」がある。これは柴が、当時のニューヨークにおける日本人商業の実況を視察して報告するものであるが、その末尾に、

米人か支那人を嫌悪するの念よりか、本邦人か支那人同様の物品を売り捌も、価も善く得意も増すの勢にて、曾て桑港及勃士頓府にて瓊少の茶を売買して其利得を以て修行する諸生の咄に、自分支那見世より買入れて、而して売り行きても相当の利あり、乍併支那人が売るときハ之に反すと云り、夫れ如此勢なれハ、日本人が其方法と其人を得て茶商に従事せハ、必ず早晚生糸雜貨の如く本邦人の恢復する、亦疑ふ可らざるなり、其好結果ハ吾輩の刮目して待つ所なり

窓とあつて、中国人がアメリカで不当に差別を受けていたことを柴が実感していたことがうかがえる。

このことは、『佳人之奇遇』本文中にも中国人范卿の言葉としてあらわれる。

今ヤ米人ノ我ヲ嫌悪スル、虺蝮蛇蝎ノ如ク、我ヲ蔑視スルコト黒奴ヨリモ甚シ、是レ諸君ノ熟知スル所ナリ、加之ナラス、輓近米政府令ヲ発シテ、清人ノ来航ヲ禁止スルニ至レリ、是レ蓋シ清人カ癡愚自ラ取ルノ罪禍ナリト雖モ、豈人間ノ自由ヲ貴ヒ平等ノ權利ヲ重スル、米人ノ施行スル政策ナリト称譽スルコトヲ得ンヤ、世言フ、天道ハ善ニ福シ欧米ハ義ニ與ミスト、然レトモ僕疑ナキ能ハス、窮達ハ命ナリ、吾独リ何ノ罪ソ茲ノ窮厄ニ遭フ（巻二）

柴の述べるように、このような行いは人間の自由を貴び、平等の権利を重んじるアメリカ人が為すべき事ではなかった。しかし当時、アメリカにおける中国人蔑視の風潮は実際に存在した。『佳人之奇遇』本文中には、他にもアメリカにおいて主人公散士が中国人と間違えられて差別的行為を受ける場面が登場する。おそらく、柴自身がアメリカで実際にこのような場面にたびたび遭遇したものとみられる。これまで述べてきたように、柴にとっては、一国の「自由」すなわち国権が奪われ顧みられない状態は、何をおいても恢復されるべきものであった。しかしながら、アメリカの気風を理想とする一方で、そのアメリカ国内で中国人が不当な差別を受けているという現実の矛盾に触れた。これは恢復されなければならないが、かつての大国であった中国には今ももうその力はない。その中で柴はますます、アジアを率いて立つのは日本であるという認識を強めていくことになったことは想像

に難くない。アメリカ人の中国人に対する差別的態度を実感する中で、優勢の欧米に対し、劣勢のアジアという構図を柴は実感したのではなかったか。この実感が、柴にアジアの牛耳をとるのは日本である、アジア諸国に「自主独立ノ真味ヲ嘗メ、文物典章ノ光輝ヲ発セシムル」のは盟主たる日本である、という使命感を強く持たせるに至った一因となったと考えられるのではないだろうか。

また、柴四朗が留学を終えて日本に帰国したのは、明治十八年一月のことであった。これは、朝鮮国で甲申事変が起こった直後であり、日清兩國の間には緊張状態が続いていた。その状況下で、柴四朗の関心はアジアの問題に直面せざるを得ず、『佳人之奇遇』においてもその話題に多く頁を割くようになるのは当然の趨勢である。繰り返すことになるが、それは、柴が物語の展開云々よりも自らの政治論説を述べることにその執筆の主眼を置いていたことによるのである。その初編においてすでに、アジアの盟主となるべく日本の将来の姿が掲げられているのは、『佳人之奇遇』初編執筆当時、すでに日本国内ではアジア問題に輿論が沸騰していた時期であったからである。

では、巻を追って日本とアジアの問題はどのように論じられていくのだろうか。『佳人之奇遇』五編巻九に至って、「東西の形勢」を論じている箇所がある。

欧ノ諸強國、平和対峙ノ利ヲ知り、競争侵掠ノ非ヲ覺リ、列國互ニ平和権衡ヲ維持スルニ汲汲トシ、唯其余威ヲ將テ之ヲ東南遠洋ニ洩シ、蚕食吞噬ノ慾ヲ恣ニセント欲シ、日清二國ノ未ダ大ニ振ハザルニ乗ジ、藩國ヲ拓有セント欲スルノ状アリ（巻九）

と、西欧列強はいわゆる「近交遠取ノ策」を執っていると述べ、世界

情勢を具体的に次のように描く。^⑤

英國ハ其手ヲ埃及ヨリ南洋ニ延べ、仏國ハ馬^{マダガスカル} 鳥^{トルキヤ}ヨリ東京ニ、獨
 國ハ南米ヨリ南洋ニ、露國ハ土ノ北境ヨリ清ノ西域ニ迫リ、朝鮮
 ノ北界ヲ窺フコト、瞭然火ヲ觀ルガ如シ、然ラバ、則東洋今日ノ
 形勢真ニ積薪ノ上ニ坐シ、火機早ク既ニ其下ニ陰伏スルヲ覺ラザ
 ルガ如シ、而シテ東洋諸國ノ為ス所ヲ顧レバ、唇齒輔車相依ルノ
 利ヲ忘レ、互ニ猜忌媚嫉、遂ニ路ヲ假シテ自ラ伐ツノ拙謀ヲ學ブ
 ニ至ルモノアリ(卷九)

この情勢を受けてアジア諸國は、世界にいかに対峙すべきかの具体
 策が示される。^⑥

東洋列國ヲ連衡シ、以テ西洋諸邦ト頡頏セント欲セバ、埃及ヲ以
 テ其鎖鑰トナシ坐ナガラ地峽ヲ拒ガシメ、印度ヲ以テ其藩屏トシ
 進シテ亞典ノ要害ヲ奪ハシメ、土耳其ヲシテ奮テ北向黒海ヨリ強
 露ノ横ヲ窺ハシメ、英露ヲシテ猜忌相争ヒ以テ歐人ヲシテ歐人ヲ
 攻メシメ、而シテ我國清國ト相合シ、小邦ヲ率キテ其背ヲ拊タザ
 ル可カラズ(卷九)

と、アジア諸國は連衡すべきとの策が提示される。柴は明治十九年三
 月から翌二十年六月までの一年間余をかけて、当時の農商務大臣谷干
 城秘書官としてここに列挙される各地を視察しており、土地勸もあつ
 たうえでの立論である。そして「我が神州人口三千七百万疆土十六万
 方哩、之ヲ英仏ニ較スルニ人寡シト為サズ、地狹シト為サズ、士馬精
 強沃野千里、古ヨリ武ヲ尚ブノ國ト称ス」として、決して日本はイギ
 リス、フランスに劣るものではないとし、今のこの劣勢は何によるの
 かといえ、

未ダ曾テ一人ノ蹶起臂ヲ揮テ真ニ歐人ノ横恣ヲ憤リ、國權ノ毀損
 ヲ慨シ、進シテ我が正理ヲ宇内ニ鳴ラスモノアルヲ見ズ、況ヤ義
 旗ヲ翻シ忠士ヲ麾キ、敢テ誓テ歐人ト兵馬ノ間ニ國權ヲ争ハント
 欲スルノ志氣アルモノニ於テヲヤ、豈能ク共ニ天下ノ大計ヲ図ル
 ニ足ランヤ(卷九)

と、アジアには西欧に対して「武力」で國權を争おうとする志気ある
 人物がいないうことによるのだと説く。^⑦さらに、

今我が神州三千七百万、満清三億万、朝鮮一千万、印度二億五千
 万、土耳其埃及四千万ノ生靈アリ、而モ頭ヲ低レ手ヲ束ネ、僅僅
 タル外人ノ輕侮ヲ受ケ恬乎トシテ愧ジズ、循循焉、偷安苟且、敢
 テ蹶起大呼天下ヲ震動鼓舞シ、暴ヲ誅シ乱ヲ平ゲ、險ヲ夷ゲ穢ヲ
 除キ、濁ヲ蕩テ清トナシ、危ヲ助ケテ寧トナシ、此類勢ヲ挽回ス
 ル雄邦偉人ナシ、嗟呼東洋ノ衰ヘタル、一ニ何ゾ斯極ニ至ルヤ
 (卷九)

と述べ、今日のアジアの衰頹の理由は、この類勢を挽回しようとする
 「雄邦偉人」がないことにあると繰り返し述べるのである。このレト
 リックを多用し柴は日本人の覚醒を促す。

そのうえで、柴は理想世界を次のように描く。

他日東洋列國ヲ連衡シ、印度ヲ助ケテ独立タラシメ、埃及馬島ヲ
 シテ英仏ノ干渉ヲ絶タシメ、朝鮮ノ独立ヲ保護シ、清國ト連合シ
 テ、遠ク露人ヲ退ケ、亞細亞洲中歐人ノ鼻息ヲ納ルナカラシメ、
 屹然宇内ヲ三分シ、亞欧米鼎立シ、武ヲ偃セ道ニ仗リ、人生安樂
 四海平和ノ大業ノ基ヲ建ツルハ、豈泰山ヲ挾テ北海ヲ超ユルノ類
 ナランヤ(卷九)

すなわち、アジア、ヨーロッパ、アメリカが鼎立する世界を理想とし、そのためにアジアの劣勢を挽回するには、アジアは連衡する必要があるというのである。そして柴は、『佳人之奇遇』を著すことによつて日本をその盟主たらしめんとしていたのである。

自身がアメリカにおいて、劣勢のアジアを実感したこと、そして帰国直後に、アジア問題の現実に直面したことによって、日本がアジアに対してとる方向性を考えずには柴の思想の展開はあり得ず、またその事を論じずには柴の政治論説の書である『佳人之奇遇』の展開もあり得なかつた。

さらに、帰国の翌年からの一年余を費やした欧米視察旅行で世界各地を歴訪した体験は、柴に劣勢のアジア認識をより強固にさせたものとみられる。『佳人之奇遇』六編巻十一から七編巻十四までは、この欧米視察が題材とされるが、そこで論じられる世界各国史には柴の国権論が貫かれる。アジア諸国の国権を恢復するため、すなわち日本が盟主となつてアジアを連衡するための政治論が展開していくのである。^⑧この視察旅行を通じて、より深く世界情勢の現実を知ることになった柴は、欧米対アジアの対立の構図をより強く認識した。この世界にあつてアジアはどうあるべきか、劣勢のアジアを率いて日本はどうあるべきかという問題を模索していくことが、『佳人之奇遇』の主題となつていったのは、柴の国権思想から端を発しているこの書物の自然な成り行きであつたといえよう。

(2) 国権論の帰趨

柴のこの立場は、実際に主人公散士がアメリカから帰国した後の日

本の状況に触れた五編巻十でさらに明確なものとなつていく。はじめにも述べたが、『佳人之奇遇』は、柴四朗執筆時と刊行時との年代に時差があるので注意しなければならない。五編が執筆されたのは明治二十三年頃と考えられるが、書物の中では明治十八年の日本を舞台にしているのである。すなわち、明治十八年当時の日本の置かれた状況を語つていながらも、二十三年前後の現況をも視野に入れてその内容が著されていると判断する必要がある。

明治十八年当時の状況を、「今ヤ日本ノ将士ハ清韓兵ノ為ニ襲撃セラレ、朝鮮国王ノ目前ニ苦戦シ、碧血城ヲ染メ彈丸宮壁ヲ破リ、互ニ死傷アリ」と述べる。そしてこれが、「是レ開戦ノ宣布ニ非ズシテ何ゾヤ」と語られるに至り、

然ルニ猶ホ悠悠不断左顧右支、苟モ無事ヲ之レ祈ル、何ゾ初メニ勇ニシテ後ニ怯ナルヤ、諺ニ曰ク、断シテ行ヘハ鬼神モ之ヲ避クト、方今ノ国是ハ唯果断勇往ニアルノミ、此激昂セル国民ヲ駆テ之ヲ指揮セハ水火モ踏マシムベシ、豈禍ヲ転ジテ福トナシ、敗ヲ回シテ勝トナシ、逆境ヲ挽キテ坦途トナシ、譏譽ヲ復シテ讚美トナシ、声ハ嶺表ニ振ヒ、功ハ日南ヲ濟フニ難カラザルナリ（巻十）

とあつて、論調は一挙に軍国主義的色彩を帯びてくる。

日清関係については、「頻年、清国ノ我（日本）ヲ猜忌シ我ヲ嫉妬スル一日ニアラズ」として「其猜忌嫉妬ノ念心腸ニ入ルコト深ク尋常ノ計ヲ以テ医スベキニアラズ」と述べ、さらに論調は激化していく。

蓋シ良医ノ大疾ヲ治ムルヤ、時ニ毒薬ヲ用フ、毒薬ヲ用フルハ其病ヲ去ラントスルガ為ナリ、今清国ト我国トノ間ニ凝結スル痼疾

ヲ驅除シ、能ク其病根ヲ絶チテ再起ノ憂ナカラシメント欲セバ、劇薬ノ力ニ倚ラザルヲ得ス、劇薬トハ他ナシ、劔戟ニ在ノミ、彈丸ニ在ノミ、爆然一発血ヲ流シ骨ヲ積ム慘ハ則慘ナリ、然レドモ今日真正ノ和平ヲ得ント欲セバ、遂ニ此劇薬ヲ用キザルヲ得ズ、古聖言ハズヤ、若シ藥瞑眩セザレバ其病愈エズト(巻十)

と述べ、「毒薬」または「劇薬」、すなわち武力による現状打開を提唱するのである。

さらに、柴の軍国主義的発想は続く。

今彼苟モ我が正当ナル要求ニ応ゼザルモノアラバ、断断乎兵馬ヲ以テ決シ、而ル後ニ互ニ手ヲ握リテ胸襟ヲ開キ宿怨ヲ洗滌シ、興亜ノ策ヲ講ジ、攻守同盟ノ約ヲ固フシ、北強俄ヲ禦ギ、西英仏ヲ控ユルノ長計ヲ建ツル、亦好カラズヤ、徒ニ円滑平和ヲ望ミ一日ノ安ヲ偷ミ、汲汲彌縫ノ策、是レ務ムルハ国家真成ノ良図ニ非ス、外交ノ秘訣ハ戦勝テ彼ヲ利用スルニアリ(巻十)

と述べ、柴の抱く「戦勝テ彼ヲ利用スル」という外交姿勢が明白となる。明治二十五年二月に柴は福島県第四区代議士に当選し政治家となるが、その前年にはこのような政治論説を堂々と表明していたのであった。

巻十ではさらに、中国人范卿が散士宛の書中に提示するという形で、柴の考える「興亜」の具体的三策を「上」「中」「他」策として掲げている。いずれも日本が盟主となり武力によって「興亜ノ大計」を建てるというものである。

日清元是唇齒兄弟ノ国ナリ、仏勢頗ル猖獗ニシテ清人ノ寒心スル所ナリ、此時ヲ以テ貴国(日本)唯東洋ノ安危ヲ以テ自ラ任ジ、

私心ヲ去リ旧怨ヲ捨テ、大ニ胸襟ヲ披キテ藩籬ヲ設ケズ、清国ト攻守同盟ノ約ヲ結び、歐人ヲ以テ東洋ノ公敵トナシ、先ヅ同盟軍ヲ興シテ台湾ノ封鎖ヲ解キ、仏ノ巡洋艦隊ヲ追撃シ東京ヲ克服シ、朝鮮ノ保護者トナリ、強俄ヲ防ギ、再ビ琉球藩王ヲ封ゼバ、清国必ズ貴国ヲ徳トシ、旧来ノ怨ヲ解キ猜忌ヲ脱セン(巻十)

と述べ、「是又興亜ノ大計ナリ」とする。これは、当時の天津条約はこの三策とは異なるものとなってしまったことを執筆時点において批判するものであると同時に、明治二十一年から二十三年頃までの柴が抱いていた「興亜」の構想であった。柴はあくまでも武力による実現をめざすのである。

これまでも柴は、アメリカの武力による国権恢復に共感を寄せ、随所で武力を率いて大国と戦った英雄を称讃して、武力による現状打開を盛んに論じている。したがって日本も武力をもって世界に対峙し、戦いに勝利してアジアを率いるべきであるとの論理である。柴四朗のこの思想的傾向は何に見て取ることができるのだろうか。

柴四朗の場合、封建的思考の次元で養われたナショナリズム(封建的忠誠)がそのまま国際規模に拡大したといわれる。前田愛氏は、『佳人之奇遇』を「大名分国制のイメエジと列強対峙のイメエジの複合、封建的忠誠とナショナリズムとの劇を、もっとも典型的に形象化した文学」として挙げられる。氏は、「東海散士のナショナリズムは十年のあいだに二度の国内戦(戊辰戦争と西南戦争)に遭遇した彼の数奇な体験と切りはなすことはできない。」とされ、「はじめは敗者として、二度目は勝者として」の柴の体験が、「ヨーロッパ諸国にたいする防衛的なナショナリズムとアジア諸国にたいする攻撃的なナ

窓 ショナリズムとが表裏一体をなしていた日本のナショナリズムの運命を象徴」しているとされる。^③この指摘自体は極めて重要である。柴は、西南戦争に従軍するに先立ち、『東京日日新聞』に寄せた「送友人西征」と題した一文の中で、薩摩藩を「天下ノ逆賊」、「人民自由ノ公敵」と呼び、「西征」に赴く旧会津藩士を鼓舞している。^④幕末に会津藩士として、敗北者の悲哀を身に承けた柴であるが、西南戦争時におけるこの一文、及び柴の戦報記事には、薩摩藩の敗北に対する共鳴はなく、やがて訪れる勝利者として自己の正当性への自信に満ちている。つまり柴は、敗北者に対する共鳴、共感へと自己を展開させているのではなく、やがて自らが手にするであろう「権力への意志」を見つめながら、思想形成が行われたと考えられる。すなわち『佳人之奇遇』に見られる柴四朗の弱小国への共感、共鳴は、武力蜂起することによって、勝利の結果、やがて得られるであろう「権力への意志」に対する共感であり共鳴であったのである。柴四朗の「天賦国権論」は、こうした「権力への意志」と結び付く限りで、弱小国、亡国者への共鳴たり得た、といってもよい。そうである以上、柴の「天賦国権論」が敗北者に対する軍国主義的侵略の方向へと帰結していったことも、ある意味で当然であったといえる。

以降の柴四朗は、ここで自ら述べているように「朝鮮ヲ懐ケ」ること、「朝鮮ノ保護者」となることに努めていく。「微力ヲ王師ノ征清ト朝鮮ノ独立トニ致サント欲」（巻十六）し、『佳人之奇遇』の終末には、遂に柴は次のように述べる。

今我国ノ朝鮮ニ於ケルヤ、宣戦ノ大詔ヲ遵奉シ、之ヲ扶植シテ以テ独立ノ基ヲ建テシメサル可カラズ、（中略）簿書推裏ニ刑ヲ刻

ミ、法ヲ鏤メ、典範ヲ制シ、歳計ヲ定メ、八道ニ日本紙幣ヲ通用セシメ、一朝ニシテ千有余年ノ制度風俗ヲ一変シ、之ヲ皇化セシメント欲ス（巻十六）

『佳人之奇遇』に貫かれた柴四朗の国権論の帰趨は、そのまま近代日本のたどる過程と重なりを帯びていったのである。

おわりに

『佳人之奇遇』著者柴四朗の思想は、近代日本思想史においていかなる位置付けを可能とするものであるのか。本稿では、その考察を進めていくために、柴四朗の国権論の独自性とその帰趨を明らかにした。

本稿で示したように、日本を離れアメリカに身を置いて世界を俯瞰するという視点を持ち、その後日本へ帰国した時点で、未だ国内の諸勢力のいずれにも帰属し得ないという点において、柴の立場は特異なものであった。その特異な立場から柴四朗が論じた「自由」は、天の賦与する大義による一国の「自由」であった。これが柴独自の国権思想の基盤となり、その著作『佳人之奇遇』はその「天賦国権論」に終始貫かれた柴の政治論説の書であった。

そこで展開された政治論説は、柴の描く理想世界、すなわちアジア、ヨーロッパ、アメリカが鼎立する世界の実現を目指し、日本がアジアを率いて盟主となるべく、そのための道を模索し続けるものであった。しかし、やがてそれは、柴四朗の思想形成の中核をなす「権力への意志」と結び付き、その思想を軍国主義的侵略へと傾向させることとなり、遂に柴に、日本が朝鮮国を「皇化」と言わしめるに至

ったのである。

『佳人之奇遇』が柴の政治論説の書でありながらも、「小説」として世に提示され、多くの読者に愛読されたことの意義は大きい。読者層がある程度限定されていた新聞、雑誌論説よりも、この「小説」が広範囲に読まれたことは想像に難くなく、ある意味で真の輿論形成の一端を担うものであった、と仮定することができないだろうか。現に特異であったはずの柴の国権論の展開とその帰趨は、近代日本のたどる富国強兵、国外侵略への過程の一端をまざまざと映し出してみせているといえるのである。柴四朗の国権論の展開を分析していくことは、同時に、近代日本の対外政策の選択における問題をも究明していくことになる。なお『佳人之奇遇』以後の柴四朗の思想については、別の機会に検討する。

柴四朗の思想を同時代の中にとどのよう位置付けていくのが筆者の課題である。まず、同時代の政治論説、例えば福沢諭吉の「脱亜論」等との比較検討作業を通じて、その答えに近付くことができるのではないだろうか。

『佳人之奇遇』を素材として多種多様な視点から近代日本思想を論じることが可能であり、この書物が持つ可能性は計り知れないのである。

註

- ① 『佳人之奇遇』の読み方と小説の構造分析については、拙稿『佳人之奇遇』を読む―小説と現実の時差―（『史窓』第五十八号、京都女子大学史学会、二〇〇一年）で試みた。
- ② 西田谷洋『東海散士『佳人之奇遇』試論』（『自由民権』一九九九年）は、『佳人之奇遇』の検討を手がかりに政治と文学の考察」を行。そ

のなかで『佳人之奇遇』評価の歴史の変遷をたどり、「文学の枠組・制度は、本来、通時的・政治的に構成されたもの」であり、『佳人之奇遇』を論じることが、現在において自明視されている文学像を、常に問い直すことに他ならない」と結論する。

③ 柳田泉『政治小説研究上巻』所収、春秋社、一九六七年。

④ 例えば筆者は、柳田氏によって紹介されていない柴四朗論説を当時の新聞、雑誌から検索する作業を続けており、いずれ改めてその成果を報告したいと考えている。

⑤ 早くは同時代の高田半峰「佳人之奇遇批評」（『中央學術雑誌』、一八八六年）によって「小説にはあらざるなり」と評される。

⑥ 飛鳥井雅道『天皇と近代日本精神史』（三一書房、一九八九年）。

⑦ 『自由新聞』明治十七年九月三十日～十月四日。

⑧ 菊地三樹「今回ノ総選挙ニ際シ本市ノ候補者タル柴四朗君ノ人物及閱歴ヲ叙シテ本市七百八十有余名ノ衆議院議員選挙有権者並ニ有志諸君ニ訴フ」（会津市立図書館蔵、一九一五年）による。

⑨ 拙稿「東海散士柴四朗の政治思想―政治小説『佳人之奇遇』発刊以前―」（『史窓』第五十六号、京都女子大学史学会、一九九九年）。

⑩ 『東京日日新聞』において「戦報採録」と題して明治十年六月二十三日から七回にわたって、また『東京曙新聞』では「戦場実話」として同十年五月八日から十日にかけて連載されている。

⑪ 谷干城一行は、それぞれの興味関心のもとに、エジプトやトルコにも立ち寄っている。『佳人之奇遇』巻十一から巻十五までは、この洋行中の見聞を題材として扱っている。他にこの欧米視察についての史料としては、谷干城による「洋行日記」（日本史籍協会編『谷干城遺稿二』所収、東京大学出版会、一九七五年）がある。

⑫ この時期の柴四朗については、拙稿「柴四朗の「国粹保存主義」―『大阪毎日新聞』主筆就任から退社まで―」（『大学院研究紀要』京都女子大学、二〇〇二年）を参照されたい。

⑬ 徳富蘆花『黒い眼と茶色の目』（大正三年）。

⑭ 前掲拙稿（註⑨）。その後の調査で新たな柴四朗論説も発見しており、詳細についてはいずれ改めて報告したい。

⑮ 『東京日日新聞』明治九年十一月二十四日(第一四九二号)。

⑯ 明治八年六月二十八日、政府は太政官布告第一一〇号、第一一一号で讒謗律の制定と新聞紙条例の改正を行った。ところが、これが当時の言論人等に暗喩、隱喩を駆使する独特の文章表現法を案出させることになった。柴のこの論説も同様である。

⑰ 寄稿論説一覧については前掲拙稿(註⑨)を参照されたい。

⑱ 『東海経済新報』明治十四年六月五日(第二十八号)、十五日(二十九号)。

⑲ 『東海経済新報』明治十五年六月五日(第六十三号)。

⑳ 『佳人之奇遇』自叙において、柴は、「蓋シ皇天ノ仁慈ナル、猶ホ且ツ万人ノ所望ヲ滿タスコト能ハス、何ソ独リ散士ノ佳人之奇遇ニ疑ヘンヤ、故ニ読者ノ評論ハ閑スル所ニアラサルナリ、平意虚心文字ニ拘泥セス、全編ヲ通覽シテ微意ノ存スル所ヲ誤ル勿クンハ幸甚」と述べている。

㉑ 散士が晩霞丘の戦場跡を訪れ賦したという詩中の話にも、「爰拳義旗除唐政、誓戮鯨鯢報国仇、解兵放馬華山陽、凱歌更盟十三州、政重公議風俗淳、策務保護国用優、東海不統自由風」(巻一)とあり、その「自由」の気風をうたいあげている。

㉒ アメリカ人の「独立自治ノ誠心」はまた、アメリカ独立戦争に義勇兵を組織して参加したフランス人「將軍羅柄斗」(ラ・ファイエット *Marquis de La Fayette 1757~1834*) の、一八三〇年フランス革命時に於ける「米人カ独立自治ノ誠心確乎トシテ動ス可カラサルノ気風ヲ慕ヒ、取テ以テ之ヲ我(フランス)民ニ教フルコト久シ、然レトモ、我民ノ氣象風教自治ノ民政ニ適セサルヲ奈何セン、宜ク賢主ヲ迎ヘテ立君公議ノ明政ヲ起スヘシ、是レ我僂国ノ良計ナリ、是レ我民人ノ幸福ナリト」の言葉をひくことによつても繰り返し讃えられる。柴は「將軍ノ言以テ殷鑑トナスヘシト」(巻一)と結ぶ。

㉓ 杉山繁「各国交際ノ形勢ヲ論ズ」(『郵便報知新聞』明治十一年二月十六日・十八日)では、「各国ノ交際ニ情誼ヲ主トシ強威ヲ弄シテ弱小ヲ凌ガス、他邦ノ權利ヲ尊重シテ以テ其邦ヲ富強ニシタルハ、唯北亞連邦共和国ニ於テ之ヲ見ルノミ」、「余輩モ亦信ズ、此争奪世界ヲ分離シテ別ニ一天地ヲトシタルハ、唯リ連邦共和国アルノミ、其戰鬥ヲ好マズシテ平和ヲ

主張シ、防守ノ戦ニ非ンバ敢テ兵力ヲ籍ラザルハ、固ヨリ尊重スル所ナリ」とあつて、かなり理想化されたアメリカ観がみられる。その一方で、無署名「欧洲各国ノ不平等」(『東京曙新聞』明治十一年十一月七日)では、「論者ハ米國ヲ以テ完全ナル善政厚徳ノ國ト為スカ、余輩ノ聞ク所ニ抛レバ、決シテ然ラズ、其風俗ハ汚穢ニシテ人民ハ唯利ニ是レ趨リ、富者貧人ヲ庄スルガ如キノ弊ハ頗ル甚シキ者アリト」と述べられ、理想化されたアメリカのイメージだけが日本を支配していたわけではなかったことが明らかである。

㉔ 例をあげると、「佳人之奇遇」は、「正しく自由民権運動で生育した最も良質な理念の成果」(林原純生「佳人之奇遇」の変貌」『日本文学』、一九九〇年)では決してない。自由民権運動が日本で盛んだった頃、柴はアメリカ留学中で日本にはいなかった。却つて柴は、自由民権運動が向かいつつある方向を警戒していたことは明らかである。

㉕ イギリスの日本に対する威嚇外交が述べられた部分は、政府によつて抹消されて出版された。

噫々英人カ先帝ノ詔ヲ裂テ地ニ擲チ、或ハ公会ニ杯盤ヲ擲チテ我ヲ凌辱シ、独国兵艦ノ我カ堂々タル国禁ヲ蹂躪シ、疫癘為メニ蔓延シ我カ同胞兄弟数万ヲシテ父母ヲ離レ姉妹ニ訣レ空ク黄壤ノ幽鬼トナラシムルカ如キ実ニ堪ユ可カラサルモノナリ、而シテ我レ之ヲ奈可トモスルコトナシ、加之ナラス、外人ノ我カ国憲ヲ蔑視シ我カ婦女ヲ姦スル臭行万丈、若シ之ヲ忍フ可クタンハ何ヲカ忍フ可カラザラン、志士皆ニ寝ネ戈ヲ枕ニシ此ノ国辱ヲ雪メスンハ後世子孫其レ我ヲ何トカカハン、悠悠不断歳月ヲ經過セハ必スヤ今ヲ以テ旧幕ノ末路ヲ見ルノ恨アララン(巻二・傍線本文抜消部)

㉖ この主張は後年、柴四朗もその作成に深く関与したとみられる谷干城の意見書中、外交上の弊を論じる中で日本は「東洋諸国の中に在りては牛耳を取りて盟主たるを得るもの」とあつて、同じ表現としてあらわれる(前掲『谷干城遺稿』所収)。

㉗ 『佳人之奇遇』巻二において、アイルランドの民族主義指導者であり政治家であつたパーネル(Charles Stewart Parnell 1844~1891)の妹バーネル女史(1849~1882)と散士とが、アイルランド問題について語る場

面が展開される。柴はアイルランド問題に深い関心を持っていたことは、その論説の多さからも明らかである。

②⑧ これについては、上野格「東海散士（柴四朗）の蔵書十明治初期経済学導入史の一駒」（『経済研究』六十四号、成城大学、一九七九年）によって、アメリカにおけるアイルランド人教師による柴への影響が指摘されている。

②⑨ 『佳人之奇遇』初編巻二において、柴は、日本士人の現状を語り終えた散士に「天道ハ果シテ是非カ、散士深ク之ヲ疑フト」と『史記・伯夷伝』の語を引用して嘆かせているが、会津藩藩校で学んだ会津藩士であった柴四朗には伝統的な儒教観念のものと天道思想が備わっていたと考えられる。

③① 明治十年代に自由民権論者によって主張された基本的人権の主張。馬場辰猪は、明治十六年一月に『天賦人權論』を出版した。馬場は、社会の生存幸福のため不可欠の自由平等は「自然ノ権利」であり、「自然法ヨリ生スル権利ハ人爲ノ製作ニ非ズシテ、天賦人權ナリト謂フベシ」と説いた。柴四朗と馬場辰猪は親交があり、『佳人之奇遇』巻十には「清狂居士」として馬場の名も登場する。柴四朗と馬場辰猪との交流は、いずれ論及したいと考えている。

③② 上野格前掲論文では、当時のペンシルヴァニア大学案内から、柴の通った Wharton School の教師、講義内容が紹介され、柴四朗の「つとめて具体的に統計を多く使いながら保護主義の必要を説く」論策は、同校での教育方針と通ずるものであると指摘する。柴が大学で具体的にどのような教育を受けたのかを調査することは今後の課題である。

③③ 『東海経済新報』明治十四年九月五日（第三十七号）、十五日（第三十八号）。

③④ 『佳人之奇遇』二編巻三。

③⑤ すでに独立党の首領朴泳孝、金玉均等が日本へ亡命していた。帰国後、柴は彼らを訪問し親交を結んだ。金玉均を訪れた時の様子は『佳人之奇遇』五編巻十に示されている。また初編巻二の跋文は金玉均によるものである。

③⑥ 明治二十四年十二月刊。明治二十三、四年頃の柴四朗の消息については

未だよくわかっていない。前掲柳田書によれば、谷千城中心の一致党を作ろうとして失敗し、「政党組織に幻滅を感じた」柴は、「この頃から次第に政治社会、政治運動から遠退くようになった」とされる。そして「他の同志が鋭意選挙準備をしている間に、散士（柴）は、もっぱら『佳人之奇遇』の完成に努めた。」とあるが、この記述の根拠は明らかではない。

③⑦ 『佳人之奇遇』五編巻九のこの丁には「歐人蚕食惨状之実図」と題した南北アメリカ大陸を除く世界図（小柴英待銅版画）が付されている。列強に蚕食されていると見なされる地が黒く塗りつぶされている図であり、柴のみる世界の構図を具象化したものとみられる。

③⑧ 同五編巻九では、散士がニューヨークで日本人の僧侶（本願寺僧北島道龍）に出会い、世界情勢を話し意気投合したエピソードが挿入されている。これが実話か否かは今のところ定かではないが、文中では散士が僧侶に送った書中にこの東洋連衡策が提示される。

③⑨ 日本人への批判が繰り返される。

③⑩ 今や我国ノ士人徒ニ空理ニ溺レ漫リニ文墨ニ泥ミ筆弁口議能ク論ズルモ、然レドモ其国ニ報ズルノ精神凜乎トシテ抜ケズ、死シテ猶ホ悔イザルモノ果シテ幾何カアル、嗟呼口ニ堂堂タル神州ト唱ヒ日本男兒ト称スルモ、豈独リ心ニ愧ヂザランヤ、僕西遊以来、本邦人士ニ接スル渺シトセズ、然レドモ真ニ国家ノ将来ヲ憂ヘ意ヲ東洋政略ニ注ギ我カ国権ノ拡張ニ熱心ナルモノ殆ド稀ナリ、問能ク字ヲ知り文ヲ解スルモ優柔不断木偶ノ精神ナキカ如シ（巻九）

③⑪ 六編巻十一からの『佳人之奇遇』では、歴訪した国々の中でとくに柴の興味関心をひいた小国の状況のみが抽出され、それぞれの国の抱える問題が取り上げられている。同じくこの旅行の記録である谷千城の前掲「洋行日記」と比較してみると、その問題意識の所在の差異は明らかであり、柴四朗の視点は一貫して小国は列強の支配する世界にどう対峙すべきか、というところに置かれていたことがわかる。

③⑫ 『日本』（明治二十五年一月三十一日）の記事によると「東海散士、奥の会津の候補者たり、一日、政治上の意見を述べて曰く、予が意見は佳人之奇遇第八巻に同じと、自著の小説を把って宣言に代ふ、亦奇」とあり、柴四朗は選挙に立候補する際にその政見として『佳人之奇遇』における持

論を引いていたことがわかる。巻八は題材としているオーストリア政府の政策を論難攻撃することによって、実は当時の日本政府を攻撃しているという内容であり、これを柴は強調したものとみられるが、そもそも『佳人之奇遇』すべてが柴四朗の「政治上の意見」とみて差し支えないことがこの表現からも明らかである。

④ 柴はこの策について、後に八編巻十六（明治三十年十月刊）において自ら次のように論じている。日清戦争を評して、「蓋我國新古以来、兵ヲ海外ニ出スモノ少シトセズ、而シテ其遺算ナク、鴻功偉烈、未ダ斯ノ如キ大捷アラザルナリ、然レドモ退キテ細ニ之ヲ尋積スレバ、是レ范卿カ十余年前ノ献策ト符節ヲ合スルガ如シ、嗚呼亦奇ナリト謂フベシ」と述べ、柴は持論の正当性を主張するのである。

④ 前田愛「明治ナシヨナリズムの原像」（『幕末・維新期の文学』法政大学出版局、一九七二年）

④ 前田氏は、『佳人之奇遇』十六巻を通じて彼（柴）が執拗に問いつづけたのは敗者にとって正義とは何かという難問であり、賊軍の汚名をこうむった会津藩の雪冤は『佳人之奇遇』執筆を促した有力な動機のひとつとされるが、果たしてそうだろうか。本論で述べてきたように、柴四朗はアメリカで世界と日本を見つめ直したのである。さらに前田氏は、西南戦争は「薩長の『義』の欺瞞性が暴露されるこの上もない機会」であり、「東海散士にとって会津藩への忠誠が『神州』の忠誠へと転轍される契機であり、封建的忠誠がナシヨナリズムへと拡大、普遍化される契機であった」とされる。しかしながら、西南戦争は薩長の「義」の欺瞞性が何ら暴露されたものではなく、依然として明治政府は薩長藩閥で有り続けた事実をみれば、会津藩への忠誠が「神州」への忠誠へと転轍される契機にはなり得ないのである。

④ 『東京日日新聞』明治十年三月九日。